

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

1. 令和7年度前期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和7年度前期に開講された科目について、各学部・学科ごとに学生による授業評価の結果をまとめた。例年、実習・実験、ゼミ、集中講義などは分析の対象外としており、同一科目のクラス別開講の場合はクラス数でカウントしているため、分析の対象となったのは人間学部93科目、人間生活学部93科目であった。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する11項目（評価基準は1～5点）の計13項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計11項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 設問群①：「授業内容」 | 3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問群②：「授業方法」 | 5項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問群③：「総合評価」 | 1項目の点数合計に対する1項目あたりの平均 |
| 設問④：「学修時間」 | 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比 |
| 設問⑤：「学修行動」 | 1項目それぞれの平均 |

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として9項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられる場合もあるが、今回は平均を利用した結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、過去の仁愛大学FD推進活動報告書を参照されたい。

1.1 人間学部

（1）共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科10科目）、および図2（コミュニケーション学科10科目）にそれぞれ示した。回答者が10名以下の学年は除外した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は419名で、各学年それぞれ1年＝341名、2年＝54名、3年＝13名、4年＝11名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は363名で、各学年それぞれ1年＝279名、2年＝69名、3年＝7名、4年＝8名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3年生以上の受講数は少なかった。

昨年度と比較して、心理学科では、授業内容はほぼ同様、授業方法はやや低下、総合評価はほぼ同様であった。コミュニケーション学科では、学年によってバラつきがあるものの、総じて昨年度とほぼ同様であった。

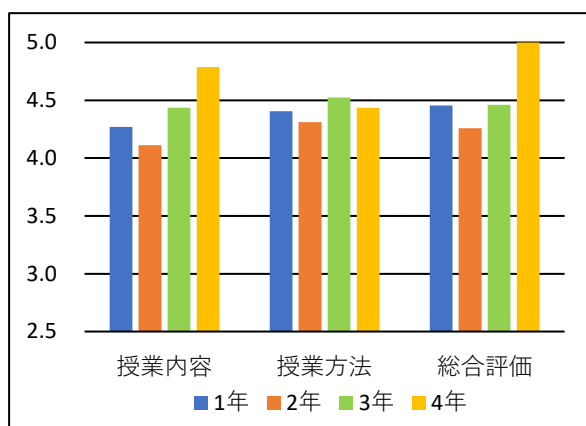


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=341名、2年=54名、3年=13名、4年=11名

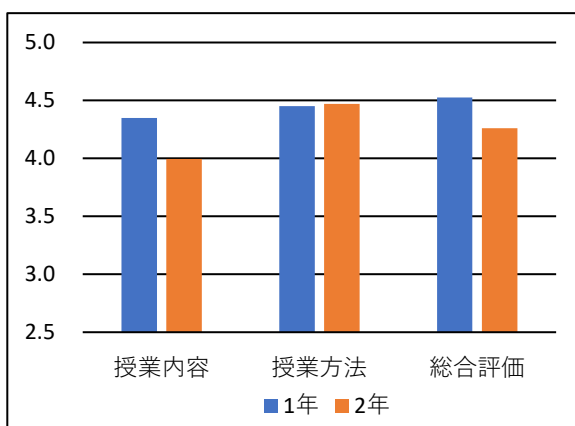


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=279名、2年=69名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科 11 科目）、および図4（コミュニケーション学科 11 科目）にそれぞれ示した。回答者が 10 名以下の学年は除外した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は 147 名で、各学年それぞれ 1 年=123 名、2 年=13 名、3 年=4 名、4 年=7 名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 153 名で、各学年それぞれ 1 年=105 名、2 年=31 名、3 年=12 名、4 年=5 名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。

昨年度と比較して、心理学科では、授業内容はやや低下、授業方法および総合評価はほぼ同様であった。コミュニケーション学科では、学年によってばらつきがあるものの、総じて、心理学科と同様の傾向が見られた。

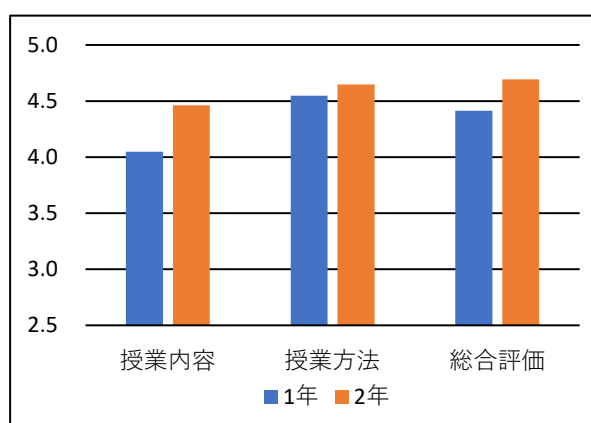


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=123名、2年=13名

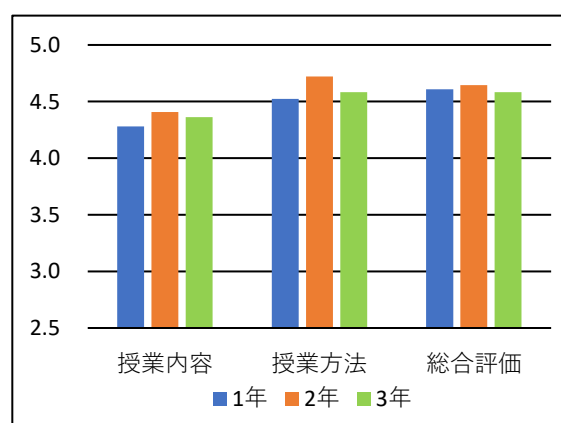


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=105名、2年=31名、3年=12名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 24 科目、コミュニケーション学科 34 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,172 名で、各学年それぞれ 1 年＝210 名、2 年＝345 名、3 年＝535 名、4 年＝82 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 950 名で、各学年それぞれ 1 年＝299 名、2 年＝370 名、3 年＝229 名、4 年＝52 名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。

昨年度と比較して、心理学科は学年が上がるごとに上昇する傾向が見られ、コミュニケーション学科は昨年と同様にばらつきはあるものの下降する傾向が見られた。

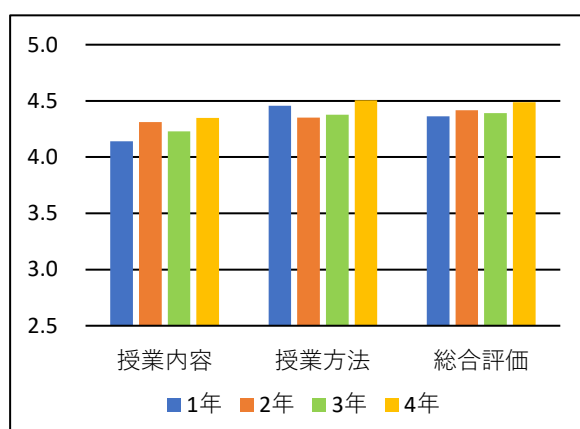


図 5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数
1 年＝210 名、2 年＝345 名、3 年＝535 名、4 年＝82 名

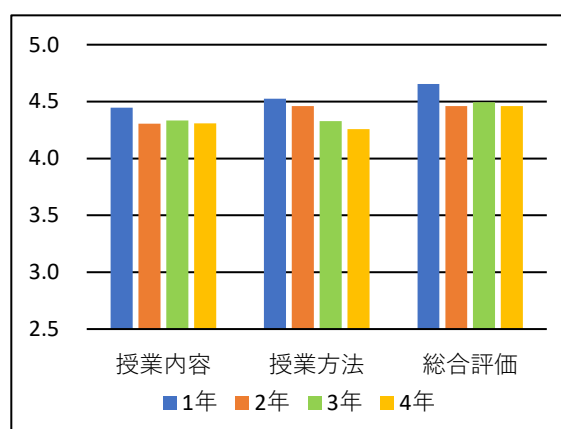


図 6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数
1 年＝299 名、2 年＝370 名、3 年＝229 名、4 年＝52 名

(4) 学修時間と学修行動

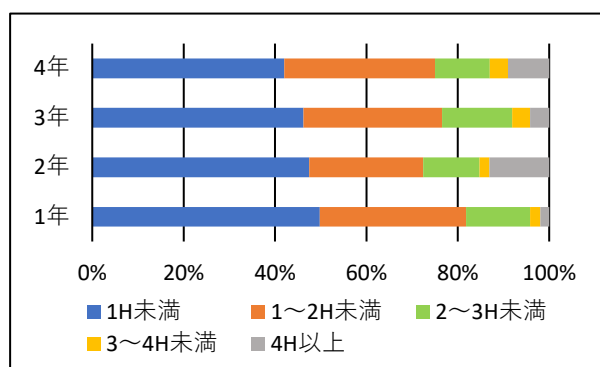


図 7 心理学科の授業外での学修時間

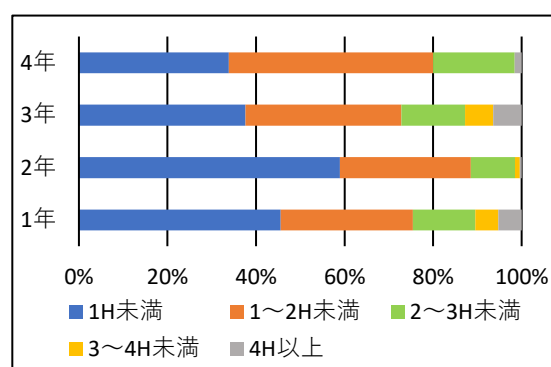


図 8 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 7 および図 8 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、昨年度に比べ、両学科ともに減少傾向にある。

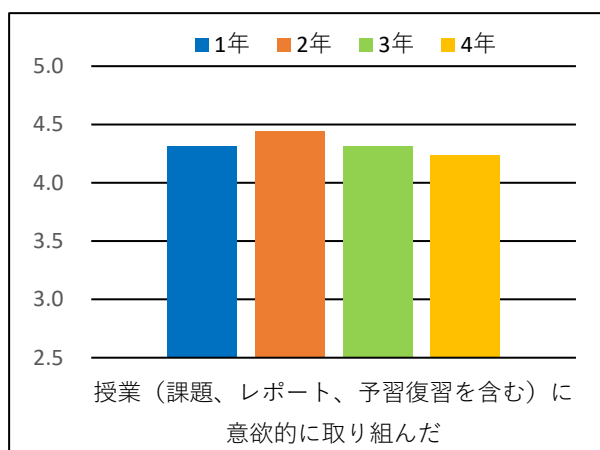


図 9 心理学科の学修行動

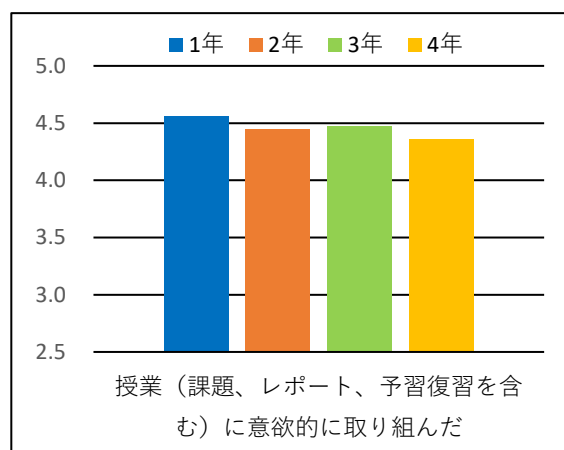


図 10 コミュニケーション学科の学修行動

続いて、各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 9 および図 10 に示した。昨年度と比較して、両学科ともほぼ同様の結果となった。

(5) 人間学部まとめ

本年度前期における人間学部の授業評価アンケート結果について、様々な角度から集計・分析を行い、全体像を概観した。その結果、昨年度前期と同様に、概ね例年通りの傾向が見られた。COVID-19 の蔓延以降、オンデマンド型授業をはじめとする ICT 技術の活用が急速に進展したが、各教員による創意工夫により、時代の要請に応じた高水準の授業が維持されていると評価できる。今後も、より良い授業の在り方を継続的に模索し、教育の質のさらなる向上に努めていくことが求められる。

(報告: 渡辺克徳)

1.2 人間生活学部

(1) 共通教養科目

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において7科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が101名、2年生が58名、3年生が7名、4年生が2名であった。項目別評価の結果、「授業内容」は2・4年生において4.0を上回ったが、1・3年生では3.8を下回った。「授業方法」は1～3年生で4.2を上回った一方、4年生では3.50であった。「総合評価」は、全学年において4.0を上回った。

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において7科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が75名、2年生が25名、3年生が6名、4年生が1名であった。項目別評価の結果、「授業内容」は全学年で3.9を下回った。「授業方法」は2～4年生において4.2を上回ったものの、1年生では3.65であった。「総合評価」は2～4年生で4.0を上回ったが、1年生では3.60であった。

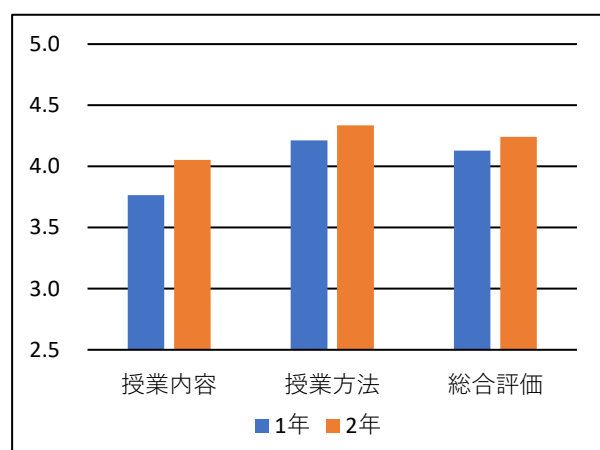


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=101名、2年=58名

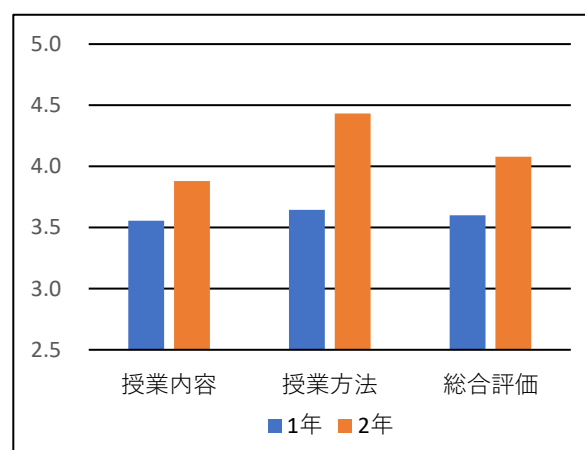


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=75名、2年=25名

(2) 共通語学科目

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が95名、2年生が7名、3年生が2名、4年生が2名であった。項目別評価の結果、「授業内容」は1～3年生で4.1を上回った一方、4年生では3.67であった。「授業方法」および「総合評価」は、全学年において4.4を上回った。

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が80名、2年生が13名、3年生が2名であった。項目別評価の結果、「授業内容」は2・3年生において4.1を上回ったが、1年生では3.76であった。「授業方法」および「総合評価」は、全学年において4.0を上回った。

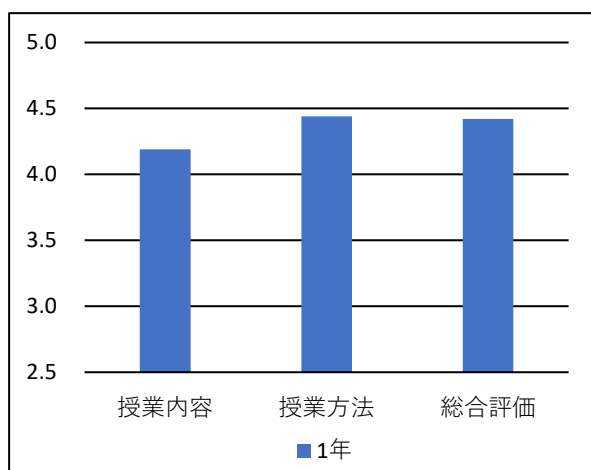


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=95名

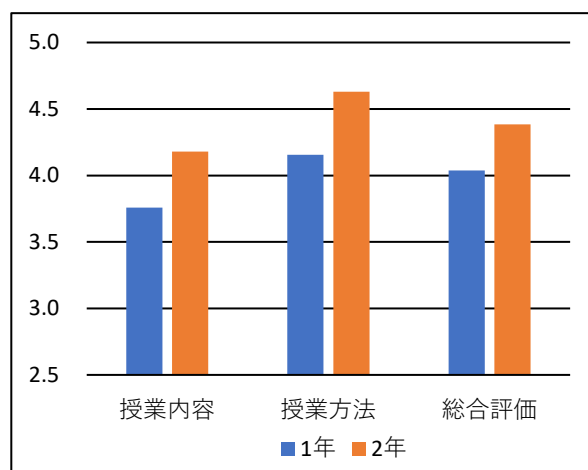


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=80名、2年=13名

(3) 専門科目

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 31 科目から回答を得た（図 5 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 364 名、2 年生が 460 名、3 年生が 218 名、4 年生が 67 名であった。1・2 年生の「授業内容」を除き、全ての設問の平均点が 4.1 以上であった。

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、33 科目から回答を得た（図 6 参照）。述べ回答人数は、1 年生が 311 名、2 年生が 396 名、3 年生が 321 名、4 年生が 79 名であった。全項目において、1・3 年生と比較して 2・4 年生は高かった。2・4 年生では、全設問で 4.5 以上であった。

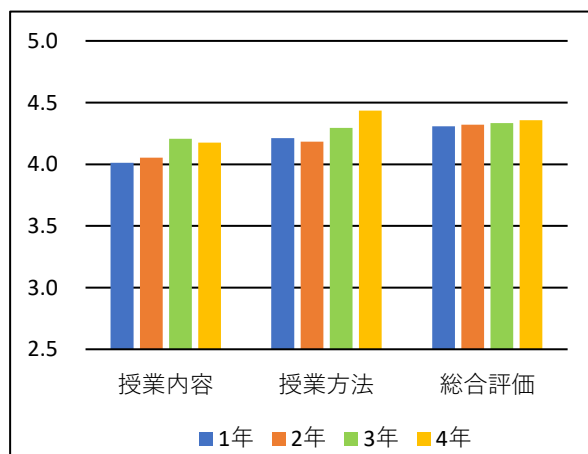


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数

1年=364名、2年=460名、3年=218名、4年=67名

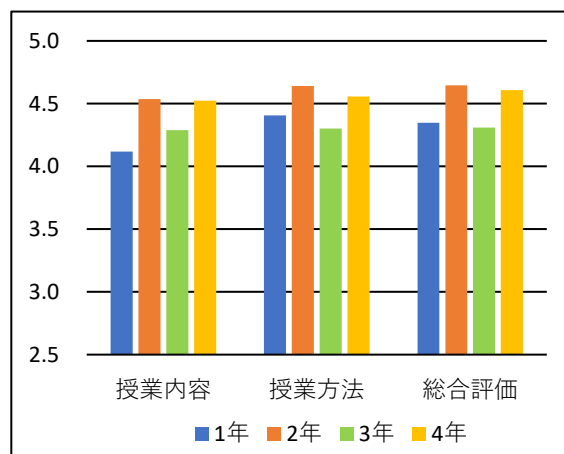


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数

1年=311名、2年=396名、3年=321名、4年=79名

(4) 学外での学修時間と学修行動

図7は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が561件、2年生が525件、3年生が227件、4年生が71件であった。1・4年生においては「1時間未満」および「1～2時間未満」の割合の合計が80%を超えていた。一方、3年生では「3～4時間未満」および「4時間以上」の割合の合計が最も高かった。

図8は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1年生が470件、2年生が434件、3年生が331件、4年生が81件であった。1・4年生では、「1時間未満」、「1～2時間未満」の割合の合計が80%以上と高かった。一方、2・3年生では「2～3時間未満」「3～4時間未満」「4時間以上」の割合の合計が高くなった。

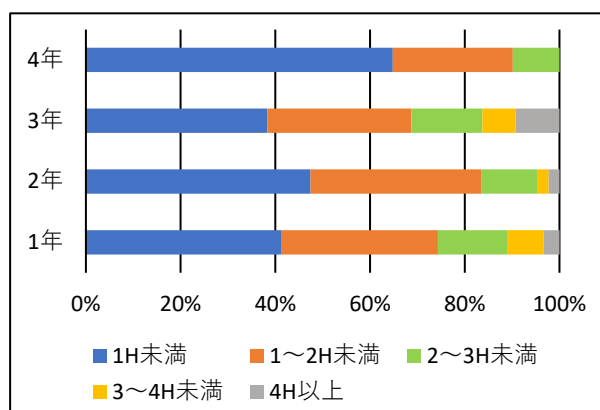


図7 健康栄養学科の授業外での学修時間

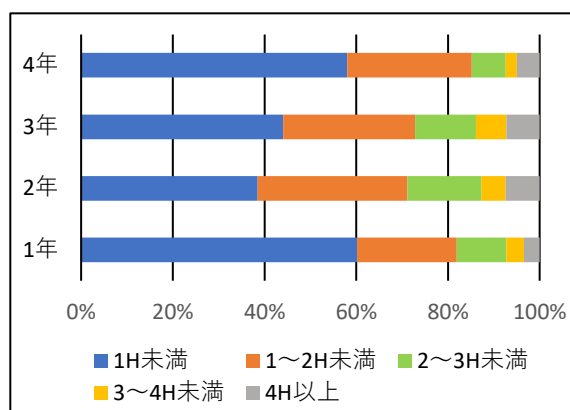


図8 子ども教育学科の授業外での学修時間

図9は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。学年間で比較した結果、3年生が4.46と最高値を示し、2年生が4.18と最低値を示した。

図10は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。学年間で比較した結果、2・4年生が4.56と最高値を示し、1年生が4.27と最低値を示した。

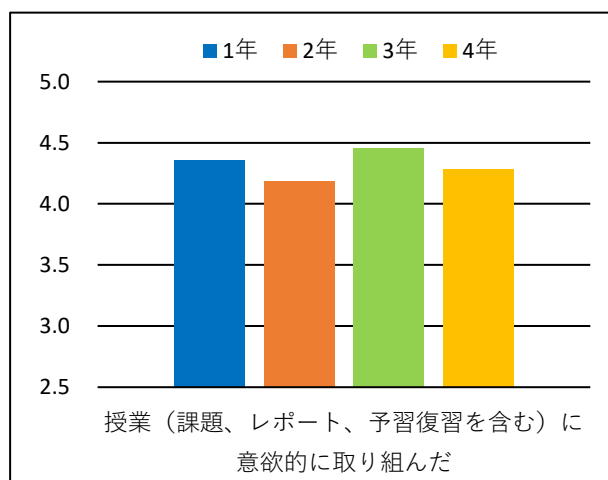


図9 健康栄養学科の学修行動

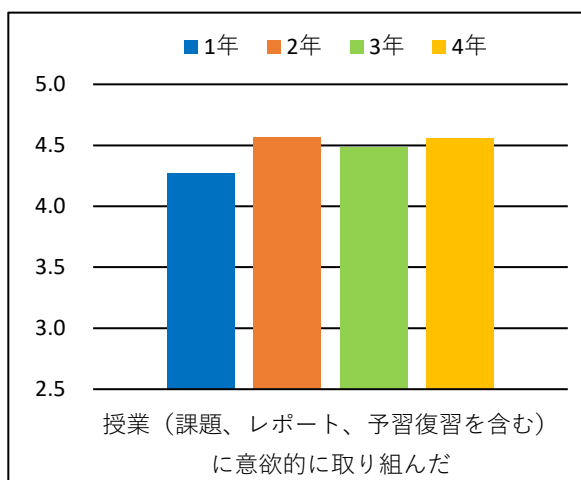


図10 子ども教育学科の学修行動

（５）人間生活学部のまとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を集計し概観した。授業評価全体を見ると、学年や学科により差はあるものの、共通科目から専門科目にかけて概ね高評価が得られていた。低学年では授業内容や学修行動にやや低めな傾向がある一方、高学年では学びの主体性や満足度が高まる傾向がみられた。これらから、学年ごとの特性に応じた授業設計や学修支援の工夫が、学習効果の向上に重要であることが示唆され、今後も授業の質向上に向けた工夫を継続することが重要であると考えられる。

（報告：新井田 裕樹）

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3. 令和7年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.1 前期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和7年度前期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された7科目についてまとめた。実施内容・方法は学部と同様であった。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および全体の平均得点に関して検討した。また、担当者が独自で個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(6) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師養成の要ともいえる演習・実習科目は重要なものであり、課題等の院生に対する負荷も大きいと考えられる。そこで、授業形態ごとの比較を行った。

図1は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は4科目、演習・実習科目数は3科目であった。講義科目も演習・実習科目も全般的に高い評価であるが、昨年度前期より総合評価を除いて特に授業内容および授業方法の評価がわずかに低下している。演習・実習科目の評価が、講義科目と比較して若干高い評価となっている点は例年通りである。

大学院の授業は受講生数が少なく、評価の変動については原因を捉え、授業に対する理解度や成績評価との関係もふまえて、よりよい授業の展開が期待される。ただし、授業評価実施科目数が少ないことは考慮すべきところである。

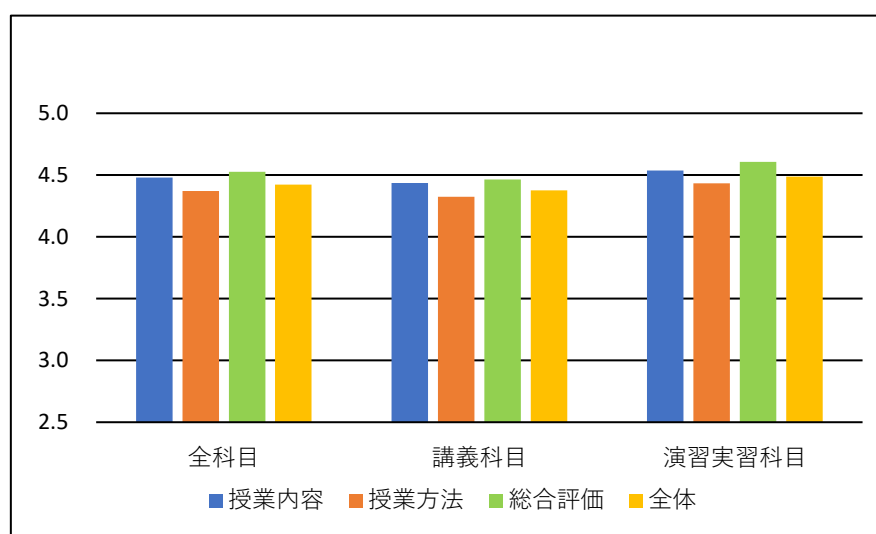


図1 各科目別の平均授業評価点

それぞれの科目数は、7、4、3科目

(報告：大森慈子)